



Title	秋成と住吉御田植神事
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	やそしま. 2007, 1, p. 34-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

秋成と住吉御田植神事

飯倉 洋一

住吉の御田植神事については、「すみのえ」二二九号（平成八年一月）の大垣豊隆「住吉大社の御田植祭」に三八ページに亘って説かれ間然するところがない。近世期については、梅園惟朝の『住吉松葉大記』が詳しいこと、『住吉名勝図会』（寛政六年刊）に豊富な図版があることなどが指摘されている。近世期、御田植は五月二十八日に行われていた。

『攝津名所図会』（寛政十年刊）は、

「神田に苗を植るの祭式也。此日社務乗車して徑當あり。又神宮寺の社僧甲冑を着て遊戯す。甚法式あり、又泉州大津より田樂人来て藝を行ふ。又堺ノ津乳守ノ傾城來ツて御田を植る体あり。昔は自ら植し也。此神事既に一千有余歳に逮ぶ也とぞ。田樂のはじめは朝野群載に詳也。此日遠近より詣人稻麻の如社頭の賑ひいはん方なし。（下略）」

レニソリ辰つハニ浊れる。

「江戸を伊豆までノナ日青面に 嘉永二年 幕府のコメ酉甚足行として大坂御廻詔を拝命
赴任当初は連日のように大坂の名勝を訪ね歩いている。五月一十八日は御田の祭りを見に行き、その様子を『蘆の若葉』に活写する。たとえば「又神宮寺の僧、いかめしげに先をおはせ、列を正して神前にむかふもあり。又は甲冑して巾をいたゞき、薙刀をつき、高しだはきて出来る。陣笠はきたる足軽、長き棒をもちて走りめぐる。御田植の後に足軽ども左右にわかれ、棒うちぶりて戦ふ事あり。これ神功皇后三韓をうち給ひし事を表せりとぞ」のとく、簡潔にして臨場感溢れる文章は巧みである（ただし傍線部は『摂津名所図会』の記述を参照したようだ）。

上方に来た南畠が、その文章力に驚き「奇」と賞した（「長夜室記」）のが、当時京都に住み、故郷大坂にも時々出てきていた上田秋成の文章であつた。秋成にも「五月雨は降るともゆかな墨江のみとしろ小田の早苗取見に」（『藤簾冊子』）の御田植詠がある。また、秋成が和文を学ぶ女性に模範文例集として書き与えた十二ヶ月の月次消息のうち、五月の手紙として書かれた文章があるが、それは住吉の御田植の話題から始まる。引用してみよう。
墨の江のみとしろ田植るを、見に出たまへりしとや。いきあひし人の告侍き。空
も清うて、をかしき御ありきにこそ。なほらひ殿の風流、みはて、帰り給はむに

は、芦分ぶねさせて、螢のひかりに盃巡らせたまはむこそ、ことにをかしく侍らめ。此あかきに物狂はしくおはせし、兵部卿のみこゝろには、まさりていとのどかる御遊びぞかし。あなたのし。（下略）

文化五年刊行の『文反古』という消息文集に収められている。手紙の相手が御田植を見物のあと螢遊びに興じたことを羨望する趣の文章である。「なほらひ殿」は本来、神祭に奉仕した神職その他の奉仕者が酒食をいただく「直会」を行う殿舎。秋成の『安々言』に「神祠ノ祭礼竟テ内宴ニ着所ヲ、直相殿ト名ク」という。伊勢神宮・賀茂別雷神社などには常設される（鶴岡八幡宮を舞台にした秋成の物語「剣の舞」にも「なほらひ殿」が登場する）が、江戸時代の住吉社の境内図を閲してもそう呼ばれる建物はないようだ。中世の住吉の神事を記す津守棟国『住吉太神宮諸神事次第』の御田植神事の項には、神官が四つの宮のお供物を備進した後、御厨で「御直会」を行うとある。消息にいう「なほらひ殿の風流」は直会の間に行われる風流を指しているのだろう。さて、このあと舟を浮かべて螢に興じたとあるが、住吉からの帰途螢遊びというのは川を北上したということだろう。南畠の『蘆の若葉』では陸路のようだが、船で住吉へ行くことがあるのか。享和二年に来阪した曲亭馬琴は八月に住吉詣でを行うが、その時のこと、「いざや住よしへ詣でんとて、書肆

大野木氏やかた船を用意して、予をいざなひ、心斎橋より乗出して、住吉明神へ参詣す（『驛旅漫録』）と書いている。船路もあつたということだ。なお、「兵部卿のみこゝろ」とは『源氏物語』「蛍巻」で、源氏が蛍の光で玉髪の姿を照らし出して兵部卿宮を驚かし、兵部卿宮が心ときめかす場面を指すのだが、それにもましてのどかな遊びですねというのである。いずれにせよ、秋成によつて選ばれた五月の風物は、住吉の御田植神事と蛍だつたというわけである。

（大阪大学教授）